

農村舞台アートプロジェクト実行委員会

調査団体名 : 農村舞台アートプロジェクト実行委員会 団体代表者名 : 伊丹靖夫、かとうさとる
 設立年 : 2010年 対応してくれた人の名前 : かとうさとる
 団体URL : <http://www.cul-toyota.com/>
 活動拠点 : 豊田市内農村舞台 調査員 : 桑淳、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab、溝口裕太
 (公財)豊田市文化振興財団文化部 レポート作成者 : Siti Norbaizura Binti Md. Rejab
 愛知県豊田市小坂町12-100
 取材日 : 2015年12月15日

活動内容

農村舞台アートプロジェクトは、豊田市内に点在する農村舞台群を地域の文化資源として活用し、伝統と創造をテーマに市民文化の創生を目指す市民プロジェクトとして発足しました。豊田市内に点在する農村舞台の活用を図るために、アートプロジェクト(個展形式の作品展)やライブプロジェクト(劇場形式のダンスやジャズなどのライブ公演)の開催や、農村舞台に関係する伝統文化の創造的な再生に向けた取り組みとして、小田木人形座の再生やアート・イン・レジデンスの試行など地域との協働を進めています。

キャッチフレーズ

農村舞台の保存と活用

会のモットー(何を大切にしているか)

<農村舞台の活用>

農村舞台は保存されたが、この舞台が人々から見向きもされなくなったということではいけません。地元の人が楽しくワイワイと使える場、たくさんの人が訪れる活気のある場となるよう目指しています。

<地域資源の活用>

各地域の財産である舞台を活用して開催されるアートやライブには、可能な限り地元縁のあるアーティストを選んでいきます。地域の空気感を大切に、地域と溶け込めるアーティストが、地域を盛り上げることに長けていると考えています。

<伝統的な舞台と、新しいアートの融合>

伝統的な舞台で伝統的な歌舞伎や人形浄瑠璃を上演するだけでなく、新しいアートとコラボレーションすることも大切です。これまでに、コンテンポラリーダンスやオペラ、バレエなど、農村舞台とは相容れないと思われるアートとの融合を図り成功を収めることで、新しい価値を創造しています。

設立から現在に至るまで変化したこと

2010年に実行委員会が設立されて以降、豊田市内の農村舞台の調査を実施し「豊田市の農村舞台絵地図」に全84舞台の全容をまとめるなど、現状の把握を進めてきました。これに加えて、舞台を活用した作品の展示や、歌舞伎、ジャズのライブ上演など、軌道に乗っているプロジェクトが複数あります。また、伝統の創造的再生として小田木人形座の再生に取り組むなど、更なる舞台の活用方法についても模索しています。

連携している団体・専門家・自治体など

農村舞台を保有する各自治区、アーティスト、(公財)豊田市文化振興財団、NPO法人豊田加茂菜の花プロジェクト、小田木人形座準備会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

豊田市内の中間山地に現存する使われなくなってしまった農村舞台の実情の調査や、調査結果を農村舞台絵地図にまとめるなど情報の集積を図っています。また、農村舞台を保存するだけでなく、これらの活用を目指した作品展示や、歌舞伎、人形浄瑠璃、オペラ「蝶々夫人ファンタジー」、ジャズライブの上演などを企画運営することで、市内に点在する84棟の農村舞台に対して、アートという側面から新たな価値の創造を目指しています。

これらの活動は、地域住民が農村舞台の価値を再発見する契機となったり、地域の伝統文化を再生する動きに繋がるなど広がりを見せています。

現在直面している課題

<更なる農村舞台の活用>

市内に84ある農村舞台は、これほど多くの農村舞台があるとインパクトを与える数字である反面、全てを平等に活用することが困難であることも事実です。したがって、取り組みが進んでいる舞台がある一方で、活用が進まない舞台もあることから、全体の底上げを図っていく必要があります。しかしながら、少子高齢化が深刻な集落では個々人の農地を守るにも苦勞している現状があるなど、抱えている問題は農村舞台を有する自治区毎に千差万別です。その為、画一的な対策では、全ての農村舞台の活用を図ることは困難であり、各々の実態に即した対応策を丁寧に考える必要があります。

<プロジェクトの発展的継続>

様々なアート及びライブプロジェクトが企画運営されていますが、これまでの取り組みを継続しつつ、新しい企画を創り出さなければプロジェクトに新鮮味がなくなり、多くの人を魅了するプロジェクトを継続することが困難となる恐れがあります。今後も、地域の資源を大切にしつつ、ネットワークの充実を図ることで、新しいアートを創造していきたいと考えています。

今後やってみたいこと

実行委員会における、これまでの取り組みや反省点を網羅した「農村舞台アートプロジェクト白書」の作成や、アート及びライブプロジェクトの更なる充実、舞台に関わる伝統的な文化の再生、農村舞台群の市民利用の促進などに取り組みたいです。

また、地元の農村舞台をネットワーク化するために連絡協議会の設立や、全国各地の農村舞台との交流を進めることで、農村舞台群として日本遺産への登録を目指すなど、多くの可能性を模索しています。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

様々な団体の様々な取り組みについての情報が蓄積される必要があり、各主体において積極的に進められている状況であると思います。これに加えて、複雑な情報をまとめてコーディネートできるような人材が必要だと考えています。

チームオリジナルの質問

<質問内容>農村舞台とはどういったものですか？

<答え>江戸時代後期から明治時代にかけて、年1度の余興を楽しむため各集落の神社境内に建てられたものです。この農村舞台は、農山村や漁村にある営業用ではない舞台の総称で、秋田から宮崎まで広く分布していますが、飛騨・東濃地域、南信地域、奥三河・豊田市東部/北部一帯には全国の約3分の1の舞台が集中しています。娯楽の乏しかった農山村では、舞台で開催される氏子の祭礼や奉納される地芝居、人形芝居は華やかな年中行事となっていたことが想像できます。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 農村舞台にはどのような装置がありますか？

<答え> 舞台によって大きく異なりますが、廻り舞台(床を回転させて芝居の場面を転換させる)、せり(役者を舞台上げたり、下げたりする)、太夫座(三味線を弾いたり語りをする場所)、下座(芝居に合わせて囃子を演奏する場所)、バッテリー(舞台を広くする装置)など、歌舞伎などを上演するために必要な装置が整えられている舞台があります。しかしながら、市内にある農村舞台の全てに十分な装置があるのではなく、建築当時の各々の地域の実情が反映された、個性的な農村舞台がそれぞれの地域に残っています。

その他、伝えたいこと

プロジェクトの実現には、行政などの支援は欠かせません。しかしながら、様々な主体の支援を受けることを前提とするのではなく、自治区のみなさんや、アーティストのみなさんと一緒になって、プロジェクトを成功させる為にやれることは何か考えることが大切であり、お互いのコミュニケーションから素晴らしい解決策が見出せると信じています。

写真



深見農村舞台



取材の様子(かとうさとる氏)



農村舞台の構造(提供:かとうさとる氏)